

水上勉全集

1

水上勉全集 第四卷

定価二四〇〇円

昭和五十一年八月二十日初版
昭和五十六年十二月十日再版

著者 水上 勉

発行者 高梨 茂

印刷者 青木 勇

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二ノ八ノ七

振替東京二一三四

検印廃止

©一九七六

目次

越後つついし親不知

霞

静原物語

あとがき

3

49

253

469

越後つついし親不知

一

杜氏とうじとは酒づくりの熟練工のことである。むかしから、灘五郷なだご郷はいうに及ばず、関西各地の酒造元は、近県各地から農閑期を利用してくる出稼人でかまじんに酒をつくらせた。酒づくりは十一月の仕込みからはじまって、翌年三月冬あけで終る。季節的にいって、雪国の農家の閑散期であった。日本海辺の雪の多い村は、冬は炭焼きと縄仕事ぐらいしか副業はなかったから、この酒づくりの出稼ぎは、なくてはならない収入源になった。

杜氏で栄えた地方は丹波である。丹波杜氏、越前杜氏、越後杜氏というふうに、出身地を頭に冠して、その杜氏の名をよんだのであるけれども、丹波杜氏は歴史も古く、全村あげて老若男子が灘五郷に入った。ひと冬を酒蔵で働いて帰る篠山村ささやまむらなどは、灘にはなくてはならぬ熟練工の里といわれた。

十一月はじめ、北陸や丹波の農家は稲を刈り終えて、脱穀をすませる。あとは、女の仕事になる。男たちは醸造元へゆく準備にとりかかり、月なかばの十五日には蔵入りした。この物語の起きた昭和十二年ごろは、現在のように酒造法も機械化していなくて、ホウロウ製のタンクなどは

みられない。蔵入りした杜氏たちは、「秋洗い」といわれる仕込桶しこみけの洗いからはじめた。仕込桶というのは、前年に酒を入れておいた桶のことである。それが空っぽになっている。まず、この桶から洗わねばならない。半切はんぎりといわれる道具類も、いちいち熱湯をそいで、ササラをかけて丹念に洗わねばならない。杜氏たちは天井の高い酒蔵で、禪ぜんどし一つになって、ころげる桶によじのぼってササラをつかった。

十一月末に仕込桶に酒の酛もとがしこまれたが、いちいち、その桶に切り火をし祈禱きとをするほど、縁起をかついだ。

「切り火」とは、石英質の火打石と鋼鉄製の火打金を打ちあわせて火花をだす所作をいうが、これが潔斎の行事で、神聖な酒の神に豊饗を祈願したのである。老杜氏が昔からの祝詞のりとをあげた。「カッチン、カッチン、切りこみましたるは、玉のようなる潔めきよめの切り火。真正面なる松尾様まつのおさま、荒神様こうじんさま、これなる鎮守様、産土うぶなの神様、八百万やおよその神々様も、お目ざめあらせ給うて、お立ち会いのほど願ひ奉る。ただいま仕込みましたるは第×号の酛もと。江戸へ出しては江戸一番、田舎へ出しては田舎一、甘く辛く、シリビンの上々銘酒とならしめ給え。祓はらい給え浄め給え」魂をこめて切り火をするのである。切り火の音に蔵内はシンと静まりかえる。ひとしお神聖の気がみなぎるのは妙であった。

酒造科学の進歩した今日にあって、甘敗あまげ、酸敗すまけといわれる腐造はなくなったが、むかしは杜氏の勘によって材料が仕込まれたが故に、仕込みは重大な出来不出来の境目といえたわけであろう。杜氏たちが緊迫した気持で切り火をしたのもうなずける。十二月はじめは、灘でさえ六甲嵐おろしが吹

いて寒い季節だが、北陸一円の醸造元でも、カラッ風が吹いて、酒倉のならんだ谷底のような露地をゆく人びとは、冬半纏をまわっていたが、蔵の中では、向う鉢巻きに襦袢一枚、褌一つの杜氏たちが、手の切れるような冷水で米をといでいた。とき水は蔵の中にある井戸からはねつるべで汲まれた。夜といわず、昼といわず、はねつるべを釣りあげる役目を「釣り屋」といい、この男は、素足で井筒の上の足場にまたがり、「後曳き」といわれる男は、天秤の両端にゆわえた綱をかわるがわるに引いてゆく。

昼夜をわかつたぬ労働なので、杜氏たちは交代で寝たが、寝所は、蔵の天井裏にある三角部屋で、昼ははずされてある梯子をたてかけ、寝るものはこの暗い屋根裏にのぼった。板の上にむしろを敷いただけのただ広い部屋に、一本の横木が寝かされていた。これが枕であった。うすいふとんをかぶって、木の枕に頭をならべて寝るのである。交代時間がきても寝ていることがあるので、老杜氏は、起床の合図に、枕の木を撲りつけた。

「釜入れ」、「打火」、「もっこ」、「滓引き、滓揚げ」といった順序に、十一月に仕込んだ酒桶はそれぞれ工程を経て三月に入ると、澄んだ清酒となって桶にたたえられる。

これで、杜氏の仕事は終るのであった。酒蔵にならんだ桶の中に満々とみたされた黄金水をあとにして、杜氏たちは故郷へ帰る。三月十五日ごろ出立となる。北陸路では雪がとけて、女たちが苗代の畦打ちにとりかかり、タネ米をぬるんだ川水につけて待っていた。

杜氏たちが、酒蔵の中で、仕事をしながら口ずさむ歌にこんなものがある。

お日はちりちり山端にかかる。

わしの仕事は小川ほど。

お日が暮れたら、あかりをつけて、親の名づけの妻を待つ。

親の名づけの妻さえあれば、わしもこの様に身は捨てぬ。

何もこの世に身を捨てなよと、後にことばをのこされた。

仕舞うて帰にやるか有馬の駕籠衆、おだて河原をたよたよと。

おだて河原をたよたよ越えて、あいの小川の数知れぬ。

松となりたや、有馬の松に、藤にまかれて、寝とござる。

歌は灘五郷の土蔵づくりの酒蔵の壁にしみだが、村に残した妻を思うて歌ったものでもあろうか。

二

越後の親不知から、断崖を削ぎ割ったようにして入りこむ歌川の溪流にそい、約五キロばかり山奥へのぼりつめたところに、歌合という寒村があった。

戸数わずかに十七戸。落ちこんだ溪谷の斜面にへばりついたようにしてある、この村の石置き屋根の粗末な家々をみていると、どうして、こんな辺鄙なところに暮さねばならないのかと、不思議に思われもするほど侘しかった。

村はそれでも溪流から竹樋たけどいで水をとって、石垣をつみ重ねてつくったせまい田畑に、陸稻おかぼ、甘藍かんらん、麦、芋類などをつくって生計をたてていた。なにぶんとも天下の難所といわれた北陸道随一の峻しい山にかくれた雪ぶかいところである。電燈もなければ、ラジオもなかった。昭和十二年ごろは、まったく文化の流れと隔絶された孤島のような部落であった。

親不知は、北アルプスが日本海に没入する断崖の果てにある。いまは越後市振いもぶりから糸魚川いといがわに至る北陸線に一つの寒駅をもっているが、市振から親不知に向って北へ進むにつれて、線路は海に沿いはじめて、先ヶ鼻、親不知、風波、竹ヶ鼻、外波となみ、鬼クリ、鬼ヶ鼻といった断崖の中腹を、海すれすれに通過する。現在、この断崖を抜ける国道は線路に沿うて中腹を通っている。しかし、昔は、海に落ちこんだ崖裾がけすそを旅人は通らねばならなかった。荒波は白いしぶきをあげて崖におそいかかり、年じゅう波濤はとうの音が岩を噛かんでいた。荒波に親は子を忘れ、子は親を忘れて、身の安全に気をうばわれ、岩間から岩間へと、夢中にかけぬけた恐ろしい道は、いまは海中に没しているが、汽車の窓から眺めても、昔の難所の面影はのこっている。だが、人びとは、親不知の海岸の風光に眼をとられるあまり、この海に没入するアルプスの断崖が、壁のように背後に切りたっているのに眼を向けて息を呑む者は少ない。ましてや、親不知をすぎ、まなしに橋をわたる歌川の山奥に、わずか十七戸の歌合部落がひっそりかくれていようとは、考えられもしないことだったのである。

歌川の橋だもとからみると、山壁を割った溪谷は吸いこまれるように淡緑色の原始林やまわいの山間へ消えているが、川口の北方に白くそぎ落したような灰色の山壁が斑紋様まだらもんようになってみえる。親不知

石灰採掘場とよばれる石灰工場である。白粉^{おしろい}をふいたような小舎^{こや}が、山裾に貝殻をひつつけたようにみえる。灰いろの石焼^{がま}き竈^{がま}のヤグラが三塔、黒い山につき出たようにみえるのも、どこことなく、うら淋しい感じをあたえないでもない。

この歌合の村に瀬神留吉という杜氏が住んでいた。留吉は三十一だったが、五尺に足らない小男で、寸詰りの額のせまい顔をしていた。なかなかの働き者だった。もともと、猫のひたいほどの田畑を守っているだけでは、妻と母の三人暮しもようやくのことと、留吉は、足腰のたたなくなった母を家に寝かせていたから、物腰^{かき}りが嵩^{かさ}んだこともあった。妻のおしんとふたりで溪下^{たにしも}の田畑へゆき、春夏は麦、陸稻、野菜を穫り、冬は京都伏見にある大和屋という釀造元へ杜氏に出た。留守中は、妻のおしんは、石灰小舎へ菰^{こも}あみに出て稼いだ。

おしんも留吉に似てよく働いた。おしんは留吉と六つちがいの二十五だった。背がひくかったけれど、色白で、ちまちまと整った顔だちをしていて、軀^{からだ}つきも、小柄なわりに鳩胸^{はとむね}だったし、お尻もふっくらと肥えていて、男好きのするかわいらしさがあった。

留吉はこのおしんを、杜氏仲間の口ききで、越後つついしの寒村からもらってきた。越後つついしは、親不知と似た断崖に面した海岸村であるが、糸魚川から、名立^{なだち}の方に向って、北へ約二十キロほどのぼったところにある。伏見の大和屋の酒蔵で知りあった杜氏で、沖中専造という古株の男がいて、この男が、いつまでも独身でいる留吉を見かねて、おしんを世話した。留吉は家も貧しかった上に、辺鄙^{へんぴ}な村で病身の母とふたり暮しである。とても、他所^{よそ}村^{むら}から嫁にきてくれるような女はいないと諦^{あきら}めていた矢先^{やせん}なので、専造のこの世話に乗り気になった。見合いは糸魚

川の町で行われたが、会ってみると、おしんは顔だちも美しいし、気性も明るい。ぴちぴちした働き者のようである。留吉は即断で専造におしんを欲しいといった。専造は承知した。嫁入りの段取りはすぐ進んだ。

歌合村へおしんが嫁してきたのは、昭和十年の春だから、留吉が二十九、おしんが二十三の年である。留吉は、おしんが働き者の上に、病母を大事にしてくれるので、感謝した。朝早く起き出、留吉といっしょに野良で働いたあと、家へ帰ると、病母の食事をすませて、汚れたものを洗濯した。寝につくのは夜が更けてからだ。しかも、何一つ不平はいわない。留吉はおしんを愛した。

おしんが、川下の石灰小舎へ菰あみに出るようになったのは、病母がよくなつて、陽当りにも出て、留守居が出来るようになったことにもよつたが、ひと冬じゅう杜氏に出て、帰ってこない夫の留守を、暢氣にあそんで待っているのはすまない気がしたからであった。

菰あみは、石灰小舎の端の方にトタン屋根の平べったい菰あみ場といわれる作業場があつて、そこで、若い女もまじえた付近の上さん連中が、藁をさしこんでいちいちあんでゆく原始的な仕事だった。おしんは歌合の村から一里半の雪道を、この菰あみに通った。もっとも、歌合の村に、同じ働き者の仲間がいたから、いっしょに通えたのであるが、総じて、どの家の女房たちも、律義な働き者ばかりであつた。

歌合の村に留吉のほかには、杜氏で京都へ出る者は二人いた。九谷育三という五十六になる杜氏頭と、佐分権助という留吉よりはまだ三つ若い男であつた。十一月の穫入れがすむと、九谷育

三は、白髪しらぎのイガ栗頭を振って、留吉の家へ出発の用意をするよう知らせにきた。留吉は杜氏の口が見つかったのも、この育三の世話によっていたし、働きの者のおしんを得たのも、いってみれば間接的にはこの育三の世話でつういの杜氏と知りあうようになったからである。育三には感謝していた。

おしんは、留吉の出発する日は、歌合の地藏山の端はなまで送った。おしんはまだ石灰菰の作業場があいていない頃なので、歌合にいたから、留吉の出発は見送れたわけだ。

「行つてきなせえ」

とおしんは細い眼をかなしそうに歪ゆがめて、見送った。

留吉は、病母のことを頼んだぞといひ置いて峠を下りてゆく。毎年のことながら、杜氏仲間の三人が歌合を出す姿は、冬が来るぞという知らせのような気がした。山向うの親不知の崖へ打ちよせる波音が激しく山をゆさぶるのもこの頃からであった。

「行つてきなせえ」

留吉は、おしんの送ってくれた別れの言葉を四カ月間、胸にあたためて伏見の大和屋で働くのであった。

まだ杜氏としては新米だった留吉は、育三をはじめとする先輩に作業を教わる期間でもあったから、いちばい、気苦労がいった。歌合から出ている権助もまた同様である。しかし、この男は、ひよろりと背が高く、六尺近かったために、小柄な留吉とは作業場が異なった。二人はあまり顔を合わせる事がなかった。留吉は「秋洗い」専門といわれた。というのは小柄だったためで、

酒桶の中へ軀ごと入って、「釣り屋」の水が小桶にくまれてはこぼれてくると、これを器用にうけとり、桶の天井へぶちあける。ササラを右手に、小桶を左手にもちながら、禪一つの姿で、くると廻る桶の中を、曲乗りのように足を巧妙にうごかしながら洗うのが巧かった。

お日はちりちり山端にかかる。……お日が暮れたら、あかりをつけて、親の名づけの妻を待つ。こんな歌を老杜氏が歌うのを聞きながら、留吉は越前や、丹波や、但馬の諸国から来た、気性の荒い杜氏たちにまじって働きづめに働いた。

当時の杜氏の賃銀は、頭、二円二十銭。麴師上廻り、二円十銭。下酛廻り釜屋、二円。道具廻し、一円九十銭。上人、一円八十銭。酒焚、二円十銭。秋洗い二円十銭となっているから、留吉は秋洗いの桶掃除役が専門であった故に、洗いがすんで上人か道具廻しに入っても、給料がわずかに下る。だから平均二円としても、十一月十五日から、三月十五日までの百二十日間に、働いた金は二百四十円であった。

今日の金額にしてみれば、大体十万円にもなるであろうか。横木の枕に寝て、昼夜をわかつたず働いても、留吉が歌合へもって帰る金額は知れたものであったといわねばならない。

三

杜氏仲間の権助が、伏見の大和屋で母危篤の電報を受けとったのは、留吉が秋洗いの仕事をすませて、道具廻しに廻った翌日のことである。酛仕込みの切り火がすんで、タタキにやらんだ桶を眺めながら、いっぶくしているところへ、ひょろりと背の高い権助がきた。

「留さ、えれえことになった。おっ母^かが死にかけとるだいの」

と権助はわれ声でいった。留吉は、最初、権助の顔をみていて、自分の母親ではないかと思った。しかし、よくきくと権助の母親であった。ほっとしたと同時に、同じ歌合の部落で、坐骨神経痛で寝たままだった権助のおふくろのくわいのようなまげを結った白髪頭を思い出して、哀れな気がした。

「頭^{かぶ}にヒマをもろて、帰^{かへ}んでくるすけ」

と権助はいった。権助のおふくろは八十七歳である。死んでも寿命といえたが、留吉の母はまだ六十であった。病身でなければ、縄しごと、蒺^{あみ}あみもできる年ごろだ。しかし、お互いに病弱なおふくろをもったという親近感も働いて、留吉が権助とはなし合うことはいつも母親のことだった。

「何か、おしんさんにことづけねえかいの」

と権助はきいた。

「なんにもないの、それより兄の伊助さんによろしゅういうてくれ」

と留吉はいった。

蔵へ入ってしまうと、よほどのことがないと表へ出られない。監獄部屋のような労働条件でもあった。権助が頭の許可を得て田舎へ帰るとすれば、同じ村出の男のことづけをききにきたのは当然といえる。

「なにもねえかいの」